



日本で初めて電気の光が灯ったところ 工部大学校の講堂

■住所
東京都千代田区霞ヶ関3丁目
■交通アクセス
東京地下鉄
虎ノ門駅 10番出口 50m

■日本ではじめて電灯が点灯

明治11年（1878）3月25日、東京・虎ノ門の工部大学校の講堂において、わが国ではじめて正式に電灯が点灯しました。

これは、工部省電信局が、万国電信連合に加盟する準備として東京・本町（現在の東銀座）に電信中央局を設け、その開局祝賀会を大臣、各国の公使など150名を超える人々を招き盛大に行なった会場でのことでした。

この日、伊藤博文工部卿から会場に電気灯を用いるよう命じられていた英国人教師エアトンは、藤岡市助、中野初子らの電信科学生を指揮し、50個のグローブ電池を用い、講堂の天井に吊るされた仏製デュボスク式アーク灯を灯しました。

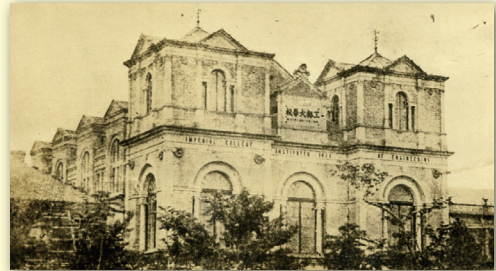
「宴会席上は白夜の感を呈し、貴客拍手して大いにこれを歓迎したが、それは束の間で、やがて会場にシューという音を聞くと同時に、アーク線は切れて宴席はたちまち暗黒となる」と昭和3年に発行された「藤岡市助伝」に記されています。

電池切れだったのでしょうか？「とにかく灯った」といった状況ですが、これがわが国で初めて電気による「あかり」が灯った歴史的瞬間でした。

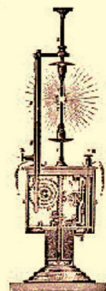
社団法人日本電気協会は、この日を記念して昭和2年（1927）に、3月25日を「電気記念日」と定めています。

工部大学校講堂は、その記念すべき場所です。

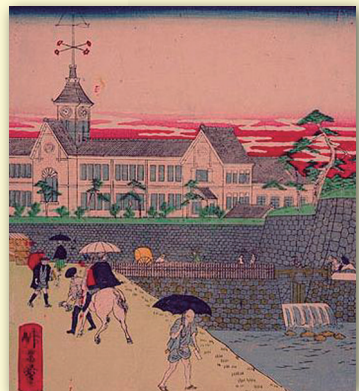
なお、一般の市民が電気の灯を目にするのは、それから4年後、東京電燈会社が銀座2丁目で宣伝用街灯を点けた時です。



工部大学校講堂（写真）



デュボスクアーク灯



名勝開化真景 虎ノ門工学局（版画）明治20年
港区郷土資料館所蔵

■当時の地図での場所

下の左図はアーク灯点灯と同じ年に発行された地図です。虎ノ門の左側に「工部大学校」と記されています。

江戸城の外堀と溜池は未だ残っており、学校は堀の石垣上に位置しています。



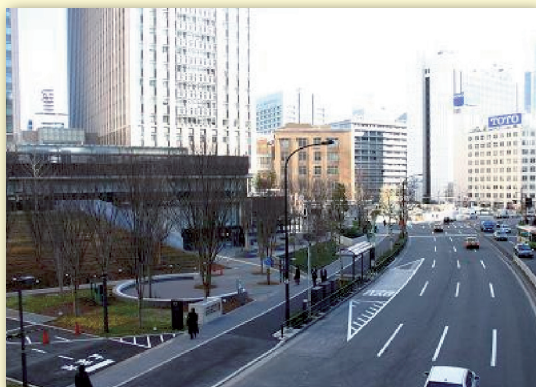
実測東京全図 明治12年（1879）
資料提供（株）人文社



現在の地図（2008）

■現在の状況

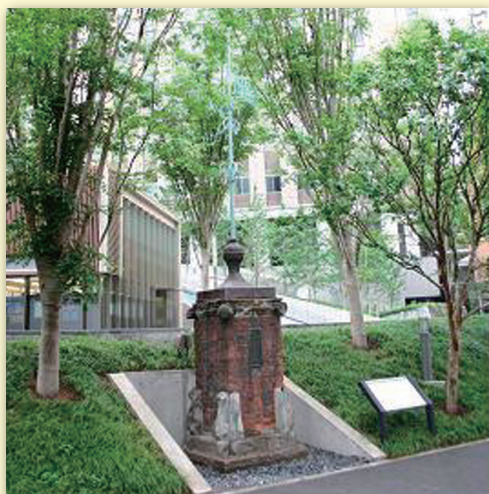
現在、外掘りは埋められて道路（外堀通り）になっており、工部大学校のあった場所は、平成15年頃から大規模な再開発がなされ、地上33階と38階の中央合同庁舎7号館などが建っています。



左側が工部大学校跡（学校趾碑は正面歩道際）
左側の高層ビルは中央合同庁舎7号館
＊外堀通りの溜池側より虎ノ門交差点方向を撮影

周りを調べたところ、学校の遺構らしきは見当たりませんでした。外堀通りの虎ノ門から溜池方面に少し上った歩道沿いの、整備された庭園の斜面に、「工部大学校趾碑」が建っていました。歴史の深みを感じさせられるレンガ積みの門柱のような構造物です。

碑の横には千代田区教育委員会の説明板があります。碑と工部大学校について簡潔に説明されていますので、その一部を紹介します。



工部大学校趾碑

＜工部大学校趾碑 区指定有形文化財＞

「会計検査院のあるこの周辺、すなわち江戸時代の虎門内延岡藩邸を中心とした地域は、言わば日本の工学発祥の地です。

明治6年（1873）、工業分野における日本人の人材育成を目的として工学校（工学寮内に設置）が開校し、同10年（1788）には工学寮が工部大学校と改称されました。工部大学校では、土木・機械・造家などの学科が、イギリスから招聘された外国人教師によって教授されていました。しかし同校は明治19年（1886）に帝国大学と合併してその工科大学となりました。現在の東京大学工学部の前身です。（以下略）」平成6年3月（20年3月補修）

■工部大学校設置以前の江戸時代の様子

下図は、江戸切絵図（尾張屋板）で、工部大学校の位置は「内藤右近将監」と記されていますが、これは延岡藩の藩主名（内藤家）が記されているからです。



江戸切絵図 元治元年（1864）
資料提供 株式会社

絵図におけるポイントとなる「虎之御門」は、江戸城36城門の一つで、町名の由来ともなっています。江戸、明治、現在の地図を比べると、外掘りや道路の位置などが比較的よく一致しています。また、この付近が江戸時代に大名屋敷だったこともうかがい知ることができます。



碑上部は、当時の尖塔の方位針を模擬しています。（前ページの版画参照）なお、先端は避雷針です。